

地球を破滅におとしいれかねない電磁スカラー・パルス砲の存在について

—スティーブン・グリアの講演から— その2

グッチ

強制的に ESP 能力を開発した人々を使って ET 宇宙船のナビをハイジャックし、スカラー砲の照準に誘導するシステム P3 工作

(2024年3月13日のグリアのセッション6から)

もう一度いうが、これは滑走路ではない。菱形が見える。そこから人工 UFO を飛ばし、それを EMP (電磁パルス) で攻撃するのだ。

人工 UFO がどこまでその攻撃に耐えられるかを見るために。

ここは実験場だ。

しかしまた実際に ET 宇宙船を追尾し撃墜するエリアとしても使われている。



去年（2023年）私のもとにある男性がやってきた。

彼はこれら西部にある施設の1つにいた。その施設についてはこれ以上のことは言えない。

彼が私を訪問した理由の1つは彼が参加を強いられた心押しつぶすような酷いプロジェクトのことを明かすためだった。

このプロジェクトは私が前に話した ET 宇宙船の追尾・撃墜と関係している。

彼は ET の死体や宇宙船の運搬に直接関わった。

しかし彼は他にも人工 UFO に乗った無辜の人たちが上空で撃ち落とされ絶命する現場にもいた。

だが彼らの存在の痕跡はまったく残されていない。すべて消し去られている。

まさに消えた航空機だ。彼らは行方不明のままこの世からかき消されている。

このようなことがこの地域の2つの施設で行われている。

しかし我々は同じような施設がアメリカ合衆国のあらゆるところに、そして世界中にあることを知っている。

E T宇宙船の撃墜もそこで行われている。

したがって、我々が記録してきたE T宇宙船回収事例の30倍くらい、多分100倍から200倍くらいは撃墜されているだろう。

なぜなら我々は関係者のリークや内部告発による撃墜例しか記録できていないからだ。

私がヘリで上空をホバリングして観察した2つの施設ではそれぞれ毎年1、2機のET宇宙船を撃ち落としていると聞かされた。

1つの施設で年に2機だとすると、2つの施設で40年間に160機撃墜したことになる。

これだけで我々が記録している撃墜数（注：122機）を越えている。

我々が記録している撃墜回収ケースの数にはこの2つの施設での撃墜数は入っていない。

だから我々が記録された撃墜例を挙げたり、年に何機のET宇宙船が撃ち落とされたかをみなさんに伝えても、その数字はたぶん実数の10%にも及ばないだろう。

この撃墜数の多さは非常に心を不安にさせるし、危険でもある。

米国は1940年代以降、地球外からの訪問者に対し、政府首脳も知らない秘密の戦争を行っているのだ。

これは極めて危険な行為である。

我々は強く感謝の念をもつべきだ。ETたちがその驚異的なテクノロジーをいまのところまだ行使していないことを。

もし彼らが攻撃的であったり、邪悪な性質をもっていたとしたら、このような事態はとっくに終焉を迎えていたことだろう。

1945年8月19日に終わっていただろう（注：2024年9月8日のロンドン講演でグリアは核爆発が電磁パルスを発生し、宇宙全体に混乱をもたらしていると言っている。ETたちが攻撃的だったら、それを看過しなかつたらう

ということ。なおもちろん広島原爆は1945年8月6日、長崎原爆は8月9日。19日は間違いの可能性もある。)

これは私の考えだが、私はこの危険を軍関係者や議員たちや行政機関にブリーフィングするときに繰り返し強調している。

人は相手をすぐ敵とみなす。「お前が金槌なら、お前以外の世界はすべて釘」という古い諺の通り。

もしあなたが軍人なら、あなたが一番理解できないことは自分が与えている脅威だ。意識に与える脅威だ。

私にはその脅威の危険性が分かる。

ET軍が侵略してくると思い込む人々を攻撃に駆り立てる恐ろしい力を感じる。そんな思い込みが明らかにある。

地球に遍在する軍事テクノロジーを本来の用途に振り向け、光速の1千倍の速さで宇宙を旅できる驚異的なテクノロジーに格上げしていくのは非常に難しいことだろう。

こんな事態はETたちの目指したことではない。彼らが目指していたことは潰えてしまった。

今ではそれがはっきり分かる。たくさんの ET たちの命が失われた今では。

彼らは我々の側からなんと多くの攻撃を受けてきたことか！

さあ、この映像だ。この種の基地はたいてい二重の目的をもっている。



地球製 UFO の飛行テストと、ET 宇宙船の撃墜の 2 つだ。

さて、この基地に関して情報源から極めて非情な事実が我々のチームにもたらされた。

その情報を伝えた人物は P3 工作と呼ばれている秘密のプログラム運営に現在深く関わっている。

私は今から マイケル・ヘレラが目撃したもの、ET 死体の木箱、施設に運び込まれている人たち、そしてこの秘密のプログラム、これらすべてがひとつの組織のしわざであることを明かしていく。

さて、この二つの施設は地下で大規模な作戦を行っている。

彼らの犠牲者となる人たちを奴隷化し、この施設に連れてきている。それは本当のことだ。

彼らはいろんな地域に人集めに行く。地域を選んで行く。

住民が飢餓に瀕していたり、自然災害で疲弊しているところを選んで行く。

つまり住民が死に直面しているところへ行く。

そして言うのだ。私たちについて来ないかと。

私たちがやろうとしているのは実験だよ。

私たちと一緒に働くか、それともここで死ぬかだねと。

するとたいていの住民は生き延びるチャンスがあるのならと、OK、行きますと答える。

こうして彼らは人々を P3 のためにスカウトする。

P3、すなわちテレパシー、直観、念動力の3つのいわゆるサイキック能力の開発のために。

そのような能力のポテンシャルがあるとみなされた子どもたちも少なからずスカウトした。

彼らの分析に基づき、女性、左利きの人、ゲイ、バイセクシャルの男性などが選ばれた。

調査の結果、極めて強力な直観力、透視能力があると判明した人たちが加えられた。

このような基準で選び、連れて来たのだ。

彼らはこの人たちをプログラムに参加させ、電子機器や麻薬を使って P3 作業員になる訓練をさせた。

このようにして ET 宇宙船のナビシステムをハッキングしハイジャックする能力が付く者を選んだ。

このような人たちを宇宙サイキック・ハイジャッカーと呼ぼう。

サイエンス・フィクションみたいだが。

これは必ずしも完璧なプログラムではなかった。

そのため能力がつかなかった者たちはトイレ掃除や料理や施設のメンテナンスを担当させられた。

彼らはこの深い地下の施設に閉じ込められて、そんなことをやらされていたの

だ。

わずかだが逃げ出す者たちがいた。友好的な人たちもいる。

P3 職員をしていたが、逃亡して今は私のチームと一緒に仕事をしている人たちもいるのだ。

私は当時彼らとすぐ会おうとした。

彼らと（2023年）10月末に会う手はずが整っていたのに、あの酷い事故が私の身に起こったのだ（注：「その1」にもあるが、マウンテンバイクのサドルに細工をされたグリアが転倒し、3カ月に4回の手術を受けるような大けがをした10月15日の事件）。

さて、よくわきまえておくべきことがある。

それはこの機密プログラムを司る幕僚たちはみな、超次元物理学や意識科学を知っているということだ。

このテーマはこの2、3時間しかない講演の枠内で、できるだけ深く掘り下げることにする。

連続講演最終日の土曜日夜（2024年3月16日）にCE-5コンタクトについて話すことになっている。

しかし今から話す内容は、我々が行っている友好的な CE-5 コンタクトではなく、連中の敵対的な ET 宇宙船乗っ取りに関することだ。

それをお伝えしようと思う。

数年前我が国の偵察ドローンが遠隔操作で飛行中、イランにハイジャックされた事件を思い出そう。

イラン側がドローンのセキュリティを突破して電子システムに侵入し、無傷の状態で着陸させたという事件だ。

彼らはそのドローンをリバースエンジニアリング（分解し研究）した。

この事件はグーグルで検索すれば出てくる。

さて、意識科学に基づいたスーパーハイテクを操るチームを想像してほしい。

彼らは意識領域が時空を超越し宇宙に遍在していることを理解している。

そして意識が特別なテクノロジーを使えば透視などができることも知っている。

さらにそのテクノロジーで他者の意識や思考にコンタクトすることもできる。

そして ET が意識で操縦する ET 宇宙船のナビシステムをそのテクノロジーで

ハイジャックし、スカラー砲の照準域に誘導して宇宙船を撃墜している。

この施設でそれが行われているのだ。

連中は最初 E T 宇宙船を追跡するところから始めて、次第にこのプログラムを作り上げていった。

このシステムを動かしていた男は私が初めてこの違法グループについて言及した 1991 年の時点ではまだこのグループに入っていなかった。

このことは [アーカイブ](#) に載っている。

The Disclosure Project → Top Priority Documents → Center for the Study of Extraterrestrial Intelligence (CSETI) The comprehensive assessment of the UFO ETI Phenomenon May 1991.pdf

これらのセクションの 1 つはテクノロジーに支援された意識 (T A C) と意識に支援されたテクノロジー (C A T) を扱っている(注: PDF ファイルの 3 ページ目にある)。

なぜこんなことを言うかという、このことがこの施設でやっていることを理解するのに重要だからだ。

今問題にしているのは UFO の反重力システムや電磁パワーのことではない。

思念や意識の量子を使ってリモートで電子システムに入り込む作業員、つまり P3 作業員のことを述べようとしている。

さて、人類が手掛けたシステムはこのようなことには適していない。

今から述べることはプリンストン大学のジャン博士（注：[Robert G. Jahn](#) 1930-2017）がやってみせたことにも関係している。

彼は 0 か 1 をランダムに選ぶ乱数発生装置を用いて被験者の意識を集中させる実験をした。

この研究についてはあとで述べることにする。

（注：NHKBS プレミアム 2014 年 1 月 18 日放映の「超常現象」で大勢の人の興奮が乱数発生装置に影響を与えたことが報告されていた。

参考：[Global Consciousness Project - Wikipedia](#)）

ET のコミュニケーション・システムは思念と意識の連係を用いているが、このシステムをリバース・エンジニアリングした非常に先進的なテクノロジーを想像してほしい。

ET 宇宙船のナビシステムは思念と生体感応機器とのコンビネーションである。

みなさんがよく目にする図にあるように、ETたちの操縦法として、操縦盤に触れ、出発！と念じるのだ。

テクノロジーに支援された意識（TAC）とは、テクノロジーが個人の意識を拡張し、目標に作用を及ぼさせることである。

意識に支援されたテクノロジー（CAT）とは個人の意図や意識が実際にテクノロジー機器を動かし、稼働させることである。

このように2つの向きがある。

私はこれをCATやTACと呼んでいる。

そして不幸なことにこれらの力が武器化されてしまった。

私は考えがあって、このことから話し始めた。

このあと話は大きく広がっていく。

私は1991、92年にコンタクト・イベントを始めたころ、気付いていなかったが、私たちの活動は違法グループにサイキックな方法で感知されていた。

それでスタイン将軍(General Joseph Stein)は私が活動をやめ、彼らのチームに加わるなら20億ドルを提供すると言ってきたのだ。

私の答えは、ノー、サンキューだった。

私は違法グループが実験的なさまざまなプログラムを行っていることは知っていたが、2023年9月に事実を知るまでは、彼らが誘い出し奴隷化した人たちを使って行っていた実験のことは知らなかった。

彼らは非常に先進的な電子機器や麻薬を使った実験で工作者たちを透視できる状態にさせていた。

私は彼らの技術がそんなに進んでいたとは知らなかった。

工作者たちは開発された能力を使って ET 宇宙船のナビシステムをハイジャックし、電磁スカラー砲の照準域に誘導していたのだった。

しかし私はこのシステムが100%うまくいくとは思っていない。

ET たちがシステムへの侵入とハッキングに気付いても、工作者たちは自分たちの仕事をやり遂げるかもしれない。

しかし工作者たちははっきり覚醒しているわけではないし、居眠り運転のような状態のときもある。

私たちのような人間に100%はない。

宇宙で唯一完全無欠なのは、何と呼ぶかは人それぞれだが、グレート・スピリット、あるいは神だけだ。

それでも作員たちがハッキングできたケースもあり、その試みは今も続けられている。

聞いたところでは、奴隷化された作員たちのほとんどが死んでいる。

またタチの悪い昏睡に陥ったあと死亡する者もいる。

しかし何人かは生き延びることができている。

現在私たちに協力している者たちも何人かいる。

しかしその元P3作員たちと一緒に悪徳集団に立ち向かう作戦はまだやっていない。

その作戦は現在準備中である（注：2025年1月中旬にその作戦は開始され、ジェイク・バーバーの証言などが始まっている）。

なぜなら彼らは自分たちがやっていた戦闘的なP3ではなく、友好的なコンタクトをしたがっているからだ。

みなさんは私の言っていることがお分かりだろうか。

私はE Tと友好的なコンタクトをするためにC E - 5を指導している。

ローテクだし、麻薬などは使わない。そんなものをあてにしてはいけない。

電子機器の支援もない。まさにローテクでやっている。

私はテクノロジーを使った能力開発が1956年ごろにはすでに何らかの形で始まっていたことは知っていた。

しかしつい最近まで、彼らがこのようなシステムを開発していたことは知らなかった。

貧しく困窮している人たちを闇の奴隷売買や人身売買のような形で連れてきて、彼らもっている資質を変え、工作者に仕立て上げているとは知らなかったのだ。

工作者たちの死亡率は非常に高い。

そんなシステムはモンスター・プログラムといえる。

そしてこのプログラムのもとで働かされ、私のもとに逃げて来た人たちは、このプログラムに関し道徳的、倫理的に非常に強い怒りを感じており、これをストップさせたいと願っている。

それこそが彼らが私のもとに来た理由である。

(中略)

CE-5 を実践している仲間たちが気付くべきことがある。

この CE-5 は本質的にとてもパワフルである (注：グリアが1973年10月、18歳の時、鹿のような目をした ET に出会い、宇宙船内に導かれて ET たちとともに ET とコンタクトする方法を決めたのが CE-5 である)。

もし意識科学を習熟できたら、化学物質や電子機器のデバイスはいらない。

しかし、違法グループが開発した電子機器デバイスは実際に存在している。

私が新たに知ったもうひとつのことは、違法グループの一派が、友好的なコンタクトを目指す CE-5 イベントに邪悪な意図をもって便乗してくることだった。

彼らは私たちのコンタクト法がとても有効で ET 宇宙船を呼び出せることを知って、CE-5 の呼びかけで宇宙船が3次元空間に出現したときを狙って撃墜しようとするのだ。

私が約25年間も CE-5 のコンタクトチームに言い続けてきたことがある。

それは ET 文明の宇宙船が現れるのはコンタクトサイトが安全であり、時間的、場所的に適切である場合だと。

なぜなら私は宇宙船の追跡があり得るし、ポータブルな電磁スカラーパルス・システムがあって、彼らがそれを使って撃墜を試みるからだった。

それが CE-5 の最中に出現した宇宙船が狙い撃ちされる事態までになったのだ（この事件は「その 3」で扱う）。

ET 宇宙船が亜空間から 3 次元空間に出現する際、ニュートリノ光が撒き散らされるが、それを NRO（米国家偵察局）の宇宙部門がキャッチし、宇宙船が攻撃されるのである（注：ニュートリノ光をキャッチする機械の開発をさせられた天才科学者の話も「その 3」に登場する）。

キャッチされると必ず攻撃される。

私たちが ET 文明とコンタクトする際に非常に用心深かったのはそのためだ。

注意し、安全を優先しよう。

コンタクトに必要な折り畳みイスなんて要らない、裏庭で UFO を呼べばいいなどというバカげたことを言う人たちもいる。

そのような子どもじみたアプローチの仕方が世間で流行っている。

そんなことは、違法グループが宇宙空間や地上に配備している全てのスカラー兵器が無力化されたときにしか可能ではない。

私はそれを無力化する手段をもっていない。じきにもつことになることを願っているが。

UFO の機密情報を開示し、違法グループのプロジェクトを制御下におくために特に重要なのは、この P3 工作を阻止することである。

私はこのことを法執行機関の実動部隊に最重要の要請として伝えている。

もし違法グループのこのシステムを廃棄しないと、私たちは破局に向かうしかない。

地球のためにこのシステムは廃棄しないとイケない。

さて、このメインの施設だが、ここでは P3 工作を行っているだけでなく、電磁スカラーパルスの作動や、人工衛星に搭載したニュートリノ光システムの送受信なども行っている。



これらのシステムをまず廃止すべきである。

そして攻撃性のないシステムに変換すべきだ。

そうすればこれらのシステムをそのまま、外交的で平和な交渉ができるプログラムに変えることができるだろう。

つまりこのシステムは本来、両刃の剣といえる。

現状では暴力、破壊、死をもたらす一方の刃だけになっている。

このシステムはETとのオープン・コンタクトを進める手段として使えるのだ。

既に存在しているこれらのテクノロジーを善用できるのである。

このような情報を伝えられた高官の中には理解を示す人物もいる。

しかし大統領や議会は正直言って違法グループのプログラムに対して無力だ。

そして本来自分たちの役目を果たすべき法執行機関の職員たちも、このプログラムについて知るには私たちの証人に頼るしかない。

彼らには情報が不足しており、情報の点では私たちのチームの方がはるかに多くもっている。

私たちが集めた情報は[情報開示プロジェクト・アーカイブ](#)に収録してある。

このアーカイブの重要性はそこにある。

アーカイブの中には未編集の情報もある。

その主要な使い道というものがある。

既に述べていることだが、一般の人が目にするアーカイブの情報は編集してある。

倫理的理由から編集で省くことがある。

米議会関係機関に多くの情報を送ってある

法執行機関の職員たちはその未編集の情報を知ることになるだろう。

全部だ。全部見せる。

既にすべての未編集の情報を上院情報委員会軍事部門と国防総省の UAP 情報収集機関アロー(AARO)に送ってある。

ホワイトハウス、大統領にも 6 月のイベント（注：2023 年 6 月 12 日にワシントン DC で行ったディスクロージャー・記者クラブでの会議のこと）の約 1 週間前にハードディスクに入れて送ってある。

それにはデータベースの更新機能や検索機能をまだつけていなかった。

生のデータだけれど、とにかく彼らはそれを手に入れている。

データを渡してある以上、違法グループのプログラムを制御できないという言い訳はできないだろう。

みなさんは記者クラブでの私の発言を聞いたと思う。

彼らがデータをもっているから言えた発言だ。

彼らはすべてのデータをもっている。

あの時点でスキャンしたすべてのデータをもっているのだ。

私たちはそれ以降さらにデータを増やしたが、彼らには事態を收拾するための行動に出るのに十分過ぎるほどのデータが渡っている。

しかし彼らは何をしたか？何もしていない。

(注：この講演は2024年3月13日に行われている。その9カ月前の2023年6月12日にワシントンDCの記者クラブでグリアのディスクロージャー会議があった。その後2023年7月26日に米議会下院でUAP公聴会が開かれ、米空軍や国家地理空間情報局NGA勤務だったグラッシュ氏が米政府は墜落UFOやETの遺体を隠蔽しているという爆弾証言をした。この約1週間前にグリアはCSETIが集めたUSAPs情報を米国政府の主要機関に送っていたわけだ。公聴会のあと世界中の報道機関が興味本位の報道をしたが、USAPsの調査にはつながらなかった。このような議論の場があっても、UAPは米国に侵入する飛行物体として安全保障上の関心を引き起こすにとどまっている。この講演のあとの2024年11月13日の公聴会ではペンタゴンからUSAPsは存在しないというメッセージが出されている。ペンタゴンはそのさいUnacknowledged Special Access Programs (USAPs) というグリアの用語を使って否定した。すなわち、ペンタゴン内に隠れているUSAPsがグリアが暴露・発信し続けるUSAPs関連機密情報を意識して、自分たちUSAPsはいないという非在メッセージを発したわけで、事情を知る者にとってはむしろ存在を告知したようにも受け取れた。

なお、USAPs の意味については [20240629.pdf](#) の第 3 部「軍産複合体 USAPs の脅威」の 1 を参照のこと。

以下、グリアの話が続ける。)

私はこのように、両方の陣営とコミュニケーションをとっている。

違法プロジェクトを行っている闇のグループ内の一部の人たちと、法執行機関の特殊実動部隊の両方とつながっている。

私がしていることはすべて包み隠さず公にしている。

データを渡された法執行機関側は不法グループが何を所有しているか、そして自分たちがそれに対し何も対処していないことも知っている。

下院監視委員会(The House Oversight Committee)にも同じデータが全て渡っている。

私は米国市民として言いたい。あなたたちは全ての情報を手にしているのに、何をしているのかと。

あなたたちは就任宣誓で誓った憲法順守の義務を怠っている。

あなたたちは義務に準じて発言すべきだ。違法グループに警告を発すべきである。

さもないと職務怠慢となり、報いが来る。

就任宣誓の誓いを破って、何も行動に出ないことなど許されていいのだろうか。

犯罪者たちは人を死なせ、E Tたちを殺している。

そんなことを放置していいのか。

連中は無辜の人たちを奴隷にし、虐待し、死なせている。

証人たちを脅迫し、何兆ドルもの金を横領し、持ち逃げしている。

(注：USAPsの資金の横領の仕方については [20240629.pdf](#) の第3部「軍産複合体 USAPs の脅威」の3.財源を参照のこと。

戦闘機開発などの予算を水増しして請求し、水増し分を横領する手口を使っている。

グリアの著書『非認可』では1994年に上院歳出委員会のディック・ダメイトがグリアに400～800億ドルがUSAPsのプロジェクトに(毎年?)

流れているが、トップシークレット閲覧許可証や委員会の権限をもってしても、それを調査できないと告げている。また2001年9月10日に当時国防長官だったドナルド・ラムズフェルトは総額2.3兆ドルの不明金があると発言している。)

私たちは法のルールがある文明のもとで暮らしているのではないのか？

すべてに例外なくルールが適用するのではないのか？

このファシストのプログラムにフリーパスを与えている状況は非常にまずい。

司直が行動に出ない理由はない。彼らはすべての情報をもっているのだから。

未編集の情報が事態を正すことのできる人たちの手に渡っている。

国防総省、ホワイトハウス、上院情報委員会軍事部門、下院監視委員会に渡っているのだ。

情報は渡してあるのだから、政府の要職にある関係者はすべて、この情報にアクセスすることができるはずだ。

事態を真剣に受け止めた人が請求しさえすれば、この未編集の情報を見ることができる。

行動に出ないどんな言い訳があるだろうか？ 何もない。

以上私は彼らに行動に出て欲しいのでこのような話をした。

(注：この2024年3月13日のセッション6の翌日、3月14日のセッション8でグリアはこんなことを言っている：

「6～8人の下院議員が2日前に特別委員会(select committee)あてに、USAPsについて調査してくれるよう申し入れた。これは私たちがプレゼンをやっている最中に起こった出来事だ」。

この連続講演は3月11日に始まっている。3月14日の2日前の3月12日はセッション2, 3があった。

そのとき下院議員たちが行動に出ていたことになる。

グリアにしてみれば、データの送り先のホワイトハウスや委員会は相応の権力を行使できるのに、まったく動かないことが情けないわけだ。

一部の議員が特別委員会に調査を申し出たのはありがたいけれど、目的に達するには前途遼遠ということだろう。)

今回の講演はここまでだが、ちょっと重い話になったかもしれない。

このあと少し質問タイムをとることにする。

以上「その2」

あとがき

グリアの講演を訳しながら思ったことがいくつかあるので、それをまず述べたい。

1. グリアは頭脳明晰、抜群の記憶力を持った人だが、同時にとても真っすぐで正直な人であり、人類の将来を心底心配していることが分かる。

証言者を守るために匿名にすること以外はすべてを公にする透明性をもっている。

豊かな包容力があるが、米国憲法に違反する行為は断固許さない正義の人という印象もある。

その高潔な人格の高さと包容力があるからこそ、違法グループの中からも次々とグリアに協力する者たちが出てきていると思われる。

2. グリアは TM 瞑想のマスターであり、透視（クリアボランス）や念動

(サイコキネーシス) の能力をもち、幽体離脱もできるなど、進歩した E T 文明ではふつうに使われている能力を地球人としてもっているが、違法グループもその能力を開発させた人たちを使って E T 宇宙船をハイジャックするなど、グリア対違法グループの闘いはサイキックな面が強くなっている。

このため、理解が追い付かない人も多いただろうと思われる。

3. 米国の政権中枢にも違法グループの存在を明かすデータを送り続けた
り、下院や上院の中でグリアに共鳴する議員が生まれたりと、グリアの闘いは米国立法府を巻き込んで展開されている。

堂々と正面突破をめざすグリアの正義感は素晴らしいが、政治家たちが送られてきた大量のデータ（そして中身は 2 で述べた内容を含む）をちゃんと読みこなしているかどうかは不明だ。

激務の政治家たちは一枚のペーパーにまとめてある書類以外は読まないという噂もある。

送りつけてあるから読んでいるはずだとは言えない。

今回のグリア側の攻勢で 3 2 0 ページに及ぶ未編集（つまり登場人物の名前もそのまま）のデータが既に米国や関係国の政権中枢に送られたは

ずだが、それもどのように扱われるかは不明である。

4. しかしことは急を要する。2026年（かそれより少しあと）というレッドラインが近づいている。

レッドラインに到達した場合、ET 文明側が違法グループの「エイリアンの侵略」キャンペーンをどうかいくぐって、介入してくるかはまだ分からない。

その前に地球側で解決するのが最善と考えるグリアの闘いが今も続いている。

グリアは2023年9月半ばにこのカリフォルニアの州境にあるモハーヴェ砂漠のロッキード・レインジ3の施設をUSAPsのへりに乗って上空から検分した。

そのときグリアは自分のスマホで施設の写真や動画を撮っており、2023年10月にその動画を上院情報委員会のメンバーにも送っている（セクション8）。

USAPsのこの施設では言葉巧みに連れてこられた人たちが機械や薬を使ってESP能力の開発訓練を受けており、透視（クリアボランス）、テレパシー、念

動（サイコキネーシス）などの能力がつくと、その超能力を使って ET 宇宙船のナビシステム（ET が意識で宇宙船を操縦する）をハイジャックし、スカラ一砲の照準域に誘導して撃墜させていた。

グリアは USAPs が ET 宇宙船を電磁スカラ一パルス砲で撃墜していることは早くから知っていたが、その撃墜のプロセスに P3 工作が関わっていたことは 2023 年 9 月まで知らなかった。

ロッキード・レインジ 3 の施設から逃げ出してきた工作者たちから実情を聞いて初めて知り、衝撃を受け、この 2024 年 3 月 11～16 日に行われた連続講演の第 6（13 日）、第 8（14 日）で P3 工作について、その非情さと危険性を暴露したわけだ。

「その 3」では USAPs 組織がいかに強力な地下基地群を構築してきたか、さらには電磁スカラ一・パルスシステムで小惑星を地球に衝突させようとしたことなどについて紹介する予定である。